

# ライカと写真行為の革新 — 写真の可能性について

研究年度・期間：平成 20 年度

研究ディレクター：山縣 熙  
(文芸学科 教授)

共同研究者：織作 峰子  
(写真学科 教授)

師岡 清高  
(写真学科 教授)

犬伏 雅一  
(芸術計画学科 教授)

森川 潔  
(写真学科 准教授)

学外共同研究者：平木 収  
(九州産業大学芸術学部  
写真学科 教授)

北尾 順三  
(写 真 家)

立花 常雄  
(写真学科 非常勤講師)

ライカに関わる研究テーマを総括した形で表現するとすれば、「ライカの登場が何を引き起こしたのか」をあらゆる角度から解明することである。この「あらゆる角度」のうち、今年度集中的に考察したのは、ライカと撮影者の身体、ならびに、日本におけるライカの受容である。

後者のテーマについて様々な位相が考えられるが、1920年代のカメラに関わる言説がライカの登場によってどのように変質するかを追求した。このようなテーマの絞り込みに至ったのは、中川コレクションの文献部分の状況によるので、まず、初年度来整理してきた中川コレクションの文献的部分について整理結果を簡潔に報告しておく。

中川コレクションの文献部分は、和書に関していうと、①カメラ雑誌、②写真集、③カメラの一般的な技術的な問題に関わる文献、④ライカに関わる文献からなる。カメラ雑誌は、アサヒカメラなどのバックナンバーであるが、特に戦前に遡って収集されているといった網羅的なものでもない。写真集は、ライカを用いて撮影したアンリ・カルチュ＝プレッソン、木村伊兵衛の写真集などが充実しているものの、これも徹底して収集されているわけではなく、交友関係を反映してのコレクションである。③の技術文献は、カメラの使い方、機構などであるが、戦前のライカ到来時における文献も含まれているので、自動的に④のライカに関わる文献に分類することもできる。さて④であるが、これは、中川氏自身がライツ社のさまざまなデータとライカ本体に関する造詣の深化を自ら活字にしたもの、また、書籍にしたものである。一方、洋書について大要を述べると、和書でいう①のカメラ雑誌は皆無であり、雑誌形式の資料は、ライカに関わるライツ社が発刊している技術データをコアとする定期発行文献である。このコレクションは戦前について抜けはあるものの相当完備した形のもので、戦後についてはほぼ完全にそろっている。言語は、英語、ドイツ語である。写真集は、カルチュ＝プレッソンが中心で、ドイツ語では、名取洋之助の写真集以外は、ライカによる撮影指南書系統のものが何冊もあり、この系列の本命とも言うべきパウル・ヴォルフ博士の書籍がほぼ網羅されているし、英語の類書も確認される。カメラの技術的問題、ライカに直接的に関わる文献は、すでに述べたライツ社の定期発行物である技術情報誌に加えて、多数のライカカタログがある。これらの貴

重なライツ社の定期刊行物については、目次の部分から全体像が見渡せるように、デジタル化を行った。文献全体についてはライカ技術資料が膨大であり、なおエクセルによって整理進行中である。

以上の整理報告からも見えてくるわけであるが、中川コレクションは、ライカ受容そのものをテーマとして行われたものでもないし、ましてやライカと身体の問題系を追求するために行われたものでもない。その本質は、ライカ受容の一つの在り方のきわめて貴重な事例といえる。ここから、日本におけるライカ受容という問題を考える上で、(ライカメカニズムに対するフェティシズムのドキュメントという意味も含めて)特筆すべきドキュメントである。ただし、中川氏の受容の在りようは、中川氏を取り囲んでいたあるいは、中川氏以前のライカ受容者たちを取り囲んでいたカメラ受容の在り方、あるいはカメラを使う写真行為の在り方を視野に入れた写真にかかわる言説空間全体を分析することによってはじめて解明できるものであり、ここで、研究上いわば非ライカ写真言説、さらにライカに先行する時代の写真言説への目配りが不可欠となってくる。この方面を掘削するための資料は中川コレクションには欠けているので、報告者が私的に収集してきたライカ以前の写真文献の言説と比較検討を行う形でライカ受容の実相の一端を解明しようとした。その線上に、中川氏を一典型とするライカ受容の意味を見極め、それを梃子に、欧米における同一の問題系へと考察を展開する。この際、機械ないし近代技術に対するフェティシズムというより包括的な問題圏を避けて通ることはできない。また、日本におけるライカ受容について写真映像をめぐる美学的・感性的問題を芸術写真から新興写真への展開軸にそって検討することが当然のごとく想定され必要であるわけだが、アマチュア的ライカ受容の位相が看過されてきているので、カルチュラル・スタディーズ的なアプローチでこの欠落を埋める必要が明白になった。

次にライカと撮影者の身体に関わる問題は、カメラと身体というより大きな研究枠の部分を構成する。「カメラと身体」というテーマが従来喚起してきたものは、写真映像内における身体表象の多面的な考察であった。撮影者が被写体である身体についてどのような表象を形成するかは、当然撮影者の身体と密接に関わるわけであるが、後者の問題圏を棚上げにしてもっぱら写真映像内の身体を自立的なものとして議論が展開されてきた。もちろん、そうした議論も当初から眼差しの問題を含みこんでおり、その意味では撮影者の身体も広義には議論の射程に入っていたわけだが、表象論的な視座の登場によって、この問題圏がいわば可視化され、議論は量的には拡大したし、写真映像内の身体もさまざまにその自立性を相対化されて、撮影者、「観客」の円環的場を議論の土台に据えることによって質的にも一定の深化を達成したといえる。ただ、そうした中であって、やはりカメラの存在そのものがいわば透明化されたままの議論に終始してきているといえる。これは、玄と論的転回前の言語に関わる議論とパラレルともいえる。

一方、カメラ・オブスクーラ以来の機械としてのカメラ本体、ならびにカメラの撮影を整える技術的環境が写真映像におよぼす影響についての考察も幅広く展開されてきた。しかし、表象論的考察も、技術論的考察も、前者についてはいささか簡略化の誹りを免れないかもしれないが、基本的には暗に心身二元論を前提として作動させこの枠組みを脱することができず、しかも生理学的機械論の延長で、補欠するものとしてカメラ機械を位置づけて考察を進めているため、議論が空転してきているように思えてならない。中川コレクションをコアとする本ライカ研究プロジェクトが起動した初年度に報告者が本学の平成18年度紀要『藝術』30号での「決定的瞬間というポエティクス」と題した小論の中で示したように、言及した心身二元論的枠組みを踏襲しつつ、カメラと撮影者の関わりをライカ型カメラを含めて考察したが、ライカ登場による撮影者にとってのカメラのいわば非透明性の浮上、換言すると身体との密接する関わり の顕在化は、いやでも心身二元論的議論枠の限界点を露呈させた。この限界点の一層の明確化は、本年一月下旬に行われた本プロジェクトの公開中間報告会において、カメラのファインダーをめぐる撮影者と世界の切り取り方に関わる共同研究者森川潔氏の発表によってさらに一歩推し進められている。この方面の議論は、レンズの問題圏を巻き込んで一層精緻化されることは間違いない。本プロジェクトの文献パート、あるいは理論パートとしては、断固として身体補欠的なカメラの議論を離脱する必要がある。それは、眼の生理学的研究の進展、アフォーダンスをめぐる認知論的研究の進展をいわば哲学的身体論に接合して、暗に前提されている心身二元論的カメラ論を超克する議論の地平に展開するというチャレンジングな課題に挑むことである。

このような問題意識の進展の下で、本年度は昨年度に引き続いて、身体論をめぐる既存の議論の徹底した読解に取り組んだ。認知論的身体論から社会学的身体論へ展開し、行為論的次元では芸能論的身体へと解析を進め、最終年度に哲学的身体論に進む。また、ライカ受容の個所で言及しておいたが、技術論という大きな枠組みの中での考察も不可欠である。とりわけハイデガーの技術論と如何に相渉るのか、を念頭においてカメラ機械の意味を追求したい。このようなプログラムの帰結をもって、最終年にライカの意義を一定程度包括的に明示できればと考える。